

# 英国保健医療システムを学ぶ London / Cambridge, UK 3/5(Sun) - 3/12(Sun)

吉田達見(東京大学医学部健康総合科学科3年健康科学コース)

# 渡航先での活動内容

#### Oイギリスの医療福祉政策: Titmussの思想とNHSの将来

London School of Hygiene & Tropical Medicineで行われた公開セミナーでは社会政策学を発達させ、第二次世界大戦後のイギリス社会福祉政策に大きな影響を与えたRichard Titmuss (1907-1973)の著作と思想についての講義が行われた。Titmussは雇用や収入、休暇、家族計画などの社会経済的側面に焦点を当てる必要があると述べ、個人の病態生理から社会の"病態生理"を解明・アプローチするべきだと説いた。政策立案においては人々の基本的ニーズが満たされることの保証を強調し、現在のNHSを含むイギリス社会福祉制度のあり方に影響を及ぼした。

そのNHSは近年支出額が増加を続けており、将来の維持可能性が懸念の対象となっている。Cambridge University, Institute of Public Healthでの公開セミナーでは、NHS支出の増大要因の分析と将来の財政的持続可能性について講義が行われた。講義では今後の経済成長や歴史的な支出推移、国際比較などを元に検討が行われ、結果として経済成長の効果と増税、政府支出の見直しによって持続は可能と思われるが、具体的な変更・見直しの内容や、増税や見直しの影響についての具体的な議論は今後は続ける必要があるだろう。

#### Oイギリス家庭医療の将来: the Future of General Practice

Cambridge Universityで行われたセミナーでは、RCGPの新議長と Lampard氏により今までイギリスの一次医療を担ってきたGPの今後に ついて講義が行われた。これからの高齢化や患者中心のケアの強化、 地域包括的な支援のためにはGPの臨床や研究におけるリーダーシッ プは強化すべきというが、日本も同様の局面を迎えており、イギリスの 経験や今後の動向には学ぶところが多いのではないかと思う。日本で も医療制度全体を見直してみる必要があるのではないだろうか。

#### 〇倫理的責務としての"Not Enabling":子宮移植と豊胸手術

University College LondonとKing's College Londonの合同で行われている研究会では、子宮移植と豊胸手術を題材に、医師や政策立案者による"not enabling"という措置についての講義が行われた。

"Not enabling"は"禁止"とは違い、直接的に選択肢を排除したり強制することなく、ある望ましくない行為へのアクセス低下や対象者への

ナッジ(nudge)を通じて、対象者が行為を行うことを難しくすることを指す。一方でnot enabling はパターナリズムの一種として患者の自律尊 重に反するとの批判もあり、正当化する ための根拠が必要である。子宮移植や豊胸手 術などのリスクや主観的理由が大きい医療行為においては、患者の利益、社会の利益、犯罪や人権侵害に加担してしまう恐れなどの観点から、not enablingは正当化されうる。しかし手術を希望する側の心理的・身体的支援を十分に行うための方策とその課題についてはまだ検討の余地があるだろう。



UCL, Roberts Building

# 目的以外に学んだ点、反省点

街中やホテルの滞在中に、街の雰囲気やテレビ・新聞の内容などについて日本と比較考察することができた。しかし文化的な面をもう少し調べて行けば、より理解を深めることができたと思う。

## 目的を達成できたか

当初の期待以上に、イギリスの保健医療について様々な視点から学ぶことができた。これを足がかりに、日本やその他の国々の医療制度についても考察を続けていきたいと思う。

### 将来の進路決定へどう影響したか

海外を訪れて視野を広げられたことに加え、情報収集や交渉の過程 で人脈も大きく増やすことができ、今後の選択肢は広がったと思う。

#### 〇イギリスの医療現場:病院、がん患者ケア施設

今回の研修ではガン患者とその家族のためのケア施設である Maggie's Centre West LondonとMaggie's Centre Wallaceを見学させていただいた。Maggie's Centreではガン患者とその患者のために情報提供や心理的な支援を行なっており、支援を求める人は誰でも、好きな時に訪れることができ、無料で支援を受けることができる。訪問した日も朝から夕方にかけてひっきりなしに来訪を受けており、スタッフ達は忙しそうな様子であった。支援といっても堅苦しいものではなく、お茶を片手に談笑を交えたものであり、訪問客とスタッフの間でリラックスした良い信頼関係が築けているように思えた。Maggie's Centreは病院のすぐ近く、もしくは敷地内に位置しており、その運営は病院から切り離された慈善団体でありながらも、病院との連続性はある程度確保されているように思われた。おそらく慈善団体であるがために可能な支援である部分も大きいが、このような組織が医療の中に自然と組み込まれていることはイギリス医療の一つの特徴ではないだろうか。





Maggie's West London外観

Maggie's Centre Wallaceにて

またCambridge中心街から北西に30kmほど離れたHuntingdonにあるHinchingdonbrooke Hospitalで、General Practiceの研修医として働いている田頭弘子先生とお会いする機会に恵まれ、イギリスの医療や研究についてお話を伺うことができた。先生のお話を通じて、イギリスではコメディカルを含む各専門職の自立性とそれに基づくチーム医療

が尊重されていること、データの保管やデータベース管理が進んでいることなどは強みとして感じた一方、GPと病院専門医の間の不十分な連携や診療科の過度な分化などの問題点も感じた。今後は日本の診療所などとの比較を行いつつ、地域の特性や全体的なバランスを考慮した上で医療チームの関係性のあり方等について考察してみたい。



Hinchingdonbrooke Hospital

## グローバルな視点とは何か

歴史的・空間的・社会的な自身の位置付けや役割を見つめ、多様な人々との交流を通じて見直しを図る姿勢が国際社会を牽引する人材には必要であり、そのような複雑な関係性を包括的に俯瞰しようとする視点こそがグローバルな視点ではないだろうか。

## 後輩へのアドバイス

"格好良い"海外経験をする必要はない。興味を持ったことや気になることがあれば、まずは後先考えず挑戦してみる価値はあると思う。 結果はどうあれ、必ずそれが自身の経験として力になるはずである。

## 研修支援制度に望むこと

施設や大学との定期交流や短期の交換留学相互受け入れなど、継続的な関係が築くことができれば、より内容の充実した研修を継続的に行えることに加え、生徒の負担も減らすことができると思われる。

また年度を跨ぐ研修や単位認定などが認められれば、さらに自身の テーマについて深く学ぶことができると思われる。授業カリキュラムと の調整も行えば、1学期などの長期研修も可能ではないだろうか。